

風を起こす

<第34回>

地域で暮らす価値を創る

朝来市市長公室あさご暮らし応援課
あさご人財創生係長

馬袋 真紀さん

「地方創生」の御旗のもと、地域活性化に向けた様々な取り組みが行われているが、一朝一夕にうまくいくものではない。自主性を発揮し、それぞれの地域の実情に合わせて、活力ある地域を創り出していく。そのカギを握るのはやはり、人材である。

私の存在意義は？

「現場に出て、地域の人たちと接しながらイキイキと働いている」——それが入庁前、馬袋さんが持っていた地方公務員のイメージだ。役場の広報担当をしていた友だちのお父さんは、あらゆる現場へ出掛け、地域の人に気さくに声を掛け、掛けられていた。その姿は「市民から愛され、必要とされている」ことを感じさせた。

入庁後、配属された教育委員会では学校教育を担当した。「1年目でもできる仕事」をこなしながら、馬袋さんは、なぜ自分はそのにいるのか、自らの存在意義を考えた。「役所の仕事というのは、誰が休んでも、

誰が担当になっても回っていかなければならない仕事です。ですが、せつかくここに就職したんだつたら、私がいたからこういう考え方ができたとか、こういう改善ができたとか、仕事の中でプラスαを生み出していかなければ、私の存在意義はないんじゃないかと思うようになりました」

だつたら、与えられている枠の中だけで仕事をしてはいけないと、馬袋さんはさつそく小中学校の教員や事務職員、給食調理員のもとへ足を運び、その声に耳を傾けた。すると、机の上では気づけなかった不満や要望が次々と浮かび上がってきた。「こんなに不満があるなら、それをきちんと解消するのが私の仕事」——プラスαの仕事はやればやるほど大変だつたが、その分、現場から評価された。

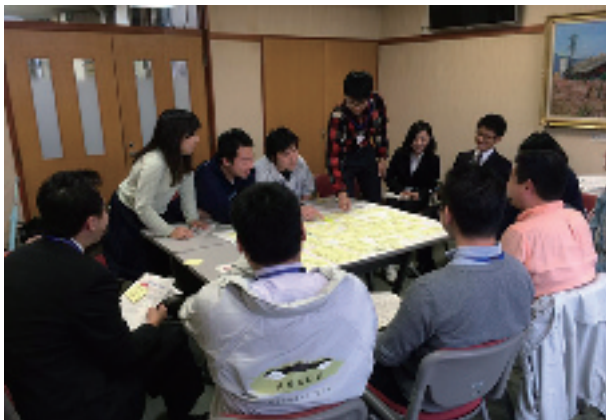


【ばたい・まき】昭和50年、兵庫県山東町（現朝来市）出身。大学では応用物理学を専攻したリケジョ。卒業後の平成10年、山東町役場に入庁。平成17年に朝来郡4町（生野町・和田山町・山東町・朝来町）合併により朝来市職員に。山東支所では地域振興と地域自治の仕組みづくりに携わる。まちづくり推進課に異動して以降、組織名は変われども一貫して地域自治づくりに尽力してきた。様々な地域活動に加え、入庁当時から消防団としても11年間活動した。家族は、夫と長男、次男、両親。

市民目線から見た「地域」と「自治」

次に配属された総務課では人事、防災、統計、選挙、企画など財政以外すべての業務を任された。中でも大きな比重を占めたのは管財。というのも、4年後に馬袋さんが当時在職している山東町を含めた4町での合併を控えていたのだ。備品も含めた全財産や書類の整理など表に見えない細かな

朝来市では平成26年度から導入された「地域おこし協力隊」。都市圏から移り住んできた人と地元の人が「お互いの力を出し合う関係」を構築して、地域を元気にしている活動を行っている



仕事が多く、帰宅は連日深夜に及んだ。

地元で「区長会」と呼ばれる自治会も担当したが、合併にあたっては各町の思いがさまざまに重なり合っているから、その調整もしなければならぬ。区長会長と直接話をする中で、いろんなことが見えてきた。それは馬袋さんにとって「地域」や「自治」について考える一つのきっかけになった。「行政サイドの考え方や行政としての決定はありますが、そこに至るまでは、市民目線であるべきではないかと私は思っています。市民がきちんと理解し、納得した上で合意され、物事が決定されていかなければならない。ですが、実際市民目線に立つてみると、市民に伝わっていないところがいろいろ見えてきて、自治」というものをもっと大事にしていかなければと意識を新たにしました」

誰もが参加できる地域自治協議会

合併後は、一貫して地域自治協議会の仕組みづくりに取り組んだ。「地域自治協議会」は区単位、地域単位の自治会とは異なり、小学校区単位での自治組織である。従来のように戸主一人が一家の代表として参加するのではなく、誰もが参加できる。地域内の多様な団体に関わってもらうこともできる。高齢化や人口減少で自治会の存続が厳しくなっている中、皆でまちづくりに参加しているという地域自治協議会の考え方は、地域自治が目指すべき方向として掲げられた。「とは言っても、理想論だけでは意味がありません。実のあるものにしていくためには、私自身も地域と一体になればならない。一市民として中に入って活動すること、リアルな課題が見えてくれば、仕事にもフィードバックできますから」

誰もが参加できるようになった地域自治協議会だが、だからと言って皆が参加してくれるわけではない。とりわけ若い世代はなかなか足が向かない。だったらと、馬袋さんは地域自治協議会を設立する前に、町や地域のことを話し合えるフラットな場を設けた。

「若い人たちも町や地域について、こうしたいという思いはあります。その思いをぎゅくばらんに話しているうちに、自分もやってみようという参加意識が高まっていけばいいなど。まちづくりに参加したいと思う人を増

やしていくことが、地域自治協議会を成功させるカギだと考えたのです」

若い世代から多く上がった声は「子どもの遊び場について」。都会と比べ遊び場には事欠かないだろうと思いきや、そうではない。過疎地では通学だけでも片道30分以上かかり、一旦帰宅してしまえば、わざわざ遊びに行こうとはならないからだ。

この課題を解決するため、保護者たちの協力により学童保育がつけられた。学校が終わったらランドセルを背負ったまま集まってきた皆で遊んだり、おじいちゃん、おばあちゃんたちにいろんなことを教わったりできる。帰る時は一斉下校する。安心して遊ばせられる場所が確保できたことで、子育てしやすい環境が一つ整った。

入庁直後から醸成してきた信頼関係

「市民の真の思いを引き出し、市民と協働で課題を解決する」——それは「市民との信頼関係」がしっかりと構築できているからこそできることである。馬袋さんは入庁直後から積極的に地域の中に飛び込んで、市民との信頼関係を醸成させてきた。

「中学・高校時代は学校生活が中心で、地域との接点はなく、その後も大学進学で離れていました。地元とはいえ、地域には読めない地名など知らないことも少なくありませんでした。まずは地域を知ろうと職場の先輩や友人たちとグループをつくり、野外

「あさご・まちづくりカフェ」では毎回異なるゲストスピーカーを呼び、話題提供してもらう



活動支援、スポーツ振興、クリーン作戦など自分たちが好きなことややることから活動を始めました」

仕事で出会う人は限られているが、地域で活動すれば、いろいろなコミュニケーションの人たちとの出会いがある。市民と同じ目線に立つて話をし、肌で感じた課題や困り事は、市役所という立場で

解決に向けた事業につなげることもできる。

自らも一市民として地域の中で活動していると、声を上げずとも様々な思いをもった市民がいることに気がつく。その声をどうすれば吸い上げられるか。どうすれば一歩を踏み出してもらえるか。馬袋さんは市民自治のまちづくりを確立すべく、様々なレベルの事業を展開してきた。その一つが平成25年度から開催してきた「あさご・まちづくりカフェ」である。

「コーヒーの香りが漂うリラックスした雰囲気の中で、まずはゲストスピーカーの話を聞きます。そこから枝葉を伸ばしていった、参加者同士でトークを楽しむというスタイルです。私たちがこういう面白いことするよ、来ない？」と行きます。みたいな出会いから

まちづくりへの一歩を踏み出してもらっています」

地域を超えて面白い人たちに出会える機会は、若い世代の知的好奇心をくすぐり、時には新しいコラボレーションも生まれる。昨年発足した「あさごぜる」がその代表例だ。地名の「あさご」と、「起こす」「開ける」を意味する方言の「こぜる」から命名した「あさごぜる」は20代〜40代前半の農家やデザイナー、自営業者らから成る。個々の専門性や人脈を生かし、移住や起業を目指す人をサポートしようと定期的に会議を開いている。メンバーは現在約25名。そのうち半数は地域おこし協力隊や移住者などいわゆる「よそもの」だ。地域自治協議会という枠を超えて気軽に集まれる場合は、彼ら自身にとつて大切な居場所にもなっている。

制度と目的をはき違えない

地方自治体が都市圏からの移住者を受入れる地域おこし協力隊は、平成21年度から始まった国の事業だが、朝来市では平成26年度に導入したばかり。今年でようやく3年目を迎える。平成21年度の時点で導入の話もあつたが、市では時期尚早と判断した。

「当時は地域自治協議会を設立して間もない頃でした。自分たちのまちを自分たちでつくっていくと動き始めた時に、外部から人が入ってきたら、彼らに任せればいいのか、となりにかまえません。せつかく育ってきた自治力が低下したのでは、元も子もありませんから」

各小学校区の地域自治協議会が中心となつてまちづくりに取り組んでいたが、自分たちだけではどうしても限界が出てきた。例えば、地域の特産品をつくつて販売ルートを確立したい場合、特産品をつくるための専門知識や都市部への人脈が必要となる。

そこで平成25年度の1年間じっくり時間をかけて、各地域自治協議会で課題を洗い出し、そこにどんな経験やノウハウを持つ人材を求めているのか話し合いを進めた。その結果を反映させ、朝来市における「地域おこし協力隊」の募集要項には地域の状況と課題、求める人材を具体的に明示した。

「受入側地域で困っていることと、それに取り組みたいという協力隊員をきちんとマッチングできれば、地域の課題が解決するだけでなく、一緒に取り組むことで地域の自治力が上がるのではないかと。さらに協力隊員に対するフォローアップを加えれば、加速度がついていくのではないかと考えました」

地域おこし協力隊の募集イベントで受入側自治体として対応した馬袋さんは、ブースを訪れた希望者の話に熱心に耳を傾け、彼らは何をしたかと思っているのか、夢や思いを丁寧に引き出した。その真摯な態度に惹かれて「馬袋さんと一緒に活動したい！」と応募してきた希望者も1人や2人ではない。

「地域おこし協力隊の方は人生を懸けて来られていますからね。こちらも責任重大です」

地域おこし協力隊の実施自治体数は平成27年度で673となつているが、成功して

いるところばかりではない。「とりあえず導入した」では、やはりうまくいかないのだ。

「地域おこし協力隊は、制度であつて目的ではありません。朝来市にとって地域おこし協力隊の目的は、地域の人たちと協力隊と一緒に活動することで、自治力が向上していくことです」

「制度と目的をはき違えない」——それは地域おこし協力隊に限らず、馬袋さんが仕事をすることでこだわっている点だ。「地域の自治の仕組みの中から、必要に応じて制度を活用していく」という姿勢にブレはない。

納税者の一人として納税できているか

「役所で仕事をしていると、自分自身一人の納税者として税金の使われ方に納税できているかという視点を忘れてしまい、こうあるべきだという『べき論』で物事を動かしがちです。そうならないよう納税者として市民として納税できているか問い掛けながら仕事をすることを心掛けています」

その視点をキープすることは容易ではないが、地域活動を積み重ねてきた馬袋さんならそれも可能だろう。「市民と同じ目線に立ち自分事としてとらえた上で、市役所としてできることを考えていくことが自分の役割」と認識している。

無論、組織の中にいれば、個人の思いだけで動けるわけではない。自分の担当でなければできないこともあるし、ジレンマを抱え

ることもある。だが、担当者に話をつなぐだけでも何か動くきっかけとなり得る。

講演などで各地を飛び回る馬袋さんだが、家に帰れば2人の男の子を持つ母親だ。「週5日のうち2日は子どもが起きている時間に帰る」というマイルールを決めていても、それがままならないことも多い。

休日も地域活動で予定はぎつしりだが、できるだけ子どもと一緒に連れて参加する。すると、子どもも地域の人たちの中に溶け込んで、面白がつて活動を手伝ってくれる。それは子どもにとって地域のことや地域の人を知る貴重な機会となる。馬袋さんが考え



「あさごぜる」は拠点づくりからスタート。子どもたちもお手伝いした(右端が馬袋さん)

る地域活動を続ける秘訣は「自分の生活の延長線上」であること。

「私はいま子育て世代ですから、その中で課題を地域活動にすれば、自分の子どもも含めて地域の子どもたちに還元されます。私が今後親の介護をするようになった場合、そこでの気付きを地域活動の中に活かせば、活動自体が自分にも、地域の人たちにも返ってきて、無理なく地域活動が続けられます」

馬袋さんが携わる地域活動や手掛けた事業は、地元のケーブルテレビで地域のニュースとして伝えられる。それを見るのが次男の日課。「これ、お母さんがやってるの?」と尋ねられ「うん。お母さんそれやってるよ」と答えると顔をほころばす。一緒にいられる時間は少なくとも、子どもは地域のために汗を流す母の後ろ姿をちゃんと見ているのだ。

馬袋さんには仕事にしても地域活動にしても、その根底には「朝来で暮らす」ことの価値を創っていきたい」との思いがある。

「私の親世代には『都会で生活することが価値あること』という感覚があり、私もそんな価値観の中で育ってきました。でも、実はそうじゃない。この町に住んでよかったですと思えるような『愛着』だったり、『誇り』というもの、自分たちで創り出していかなければいけないと思っています」

「地域で新しい価値を創造していく」——そう発想すれば、地方公務員ほどクリエイティブな仕事はないのかもしれない。

(取材/ライター 更田沙良)